雪に願いを…

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪に願いを…

【Ｎコード】
Ｎ３２７１Ｂ

【作者名】
ＡＫＩＲＡ

【あらすじ】
クリスマスの日に僕は風邪を引いた。彼女は合コンに行ったと聞き、落ち込んでいた。そんな時、ふいになった部屋の呼鈴。出るとそこには彼女がいた。

（前書き）

２４日に投稿したかったのですが、ダメでした。何とか今年中に書けて良かったです。ではどうか最後まで読んで下さい。

「ゴホッゴホッ！」
クリスマスイブの日。外は４時ながらすでに暗みを帯びてきた。
「ちきしょう。ついてないなぁ、こんな日に風邪引いちまうなんて」
町中が色んな電飾やイルミネーションが施されている今日。そんな日に風邪を引いてしまった僕。まあこれと言って予定があったわけではないから、別に落ち込む必要は無い。無いのだが・・・。
「美希～、今どうしてんだ～？」
天井を見上げながら呼ぶ名前は、僕の彼女の名前。
『Ｙｏｕ　ｇｏｔ　ａ　Ｍａｉｌ♪』
不意に枕元の携帯がなった。
（まさか、美希かな）
病人とは思えぬ素早さで携帯をとる。メールの送信者名を見ると、それは友人からだった。がっくりしながらもメールの内容を見ると、
『お前の愛しの美希ちゃんは合コンらしいぞ♪ドンマイ♪』
携帯を投げ捨てた。携帯はガチャンという音を立て、床を転がった。
もっと気の利いたメールは出来ないのか？友人だったら『大丈夫か？』の一言ぐらいあったって罰が当たらない。それなのに俺の友人と来たら病人に対してのいたわりすらない。それに今までのメールで見た事の無い音符の記号まで入れてやがる。
・・・ヤバイ、熱が上がる・・・
それにしても美希は合コンか。悲しいなぁ・・・。
こんな事ならケンカなんかしなきゃ良かったな。
――――

―――――
―――――
２日前の２２日。僕の部屋での事。
「何でお前は何時も分かんないんだ！」
「そんな、別に良いじゃないか！」
「あ～もう、うるさい！」
『パンッ！』
「痛！何も叩く事無いじゃないか！」
叩かれた頬は赤くはれ上がる
「この分からずや！」
美希は僕の部屋を飛び出していった。
ケンカの原因は目覚し時計。元カノから貰った物で使い勝手がいいので今もずっと使わせてもらってたのだ。それに気付いた美希は快く思わず、そしてケンカになった。
美希が飛び出していった後の部屋に取り残された僕。足元にはケンカの最中に放り投げられ、壊れてしまった目覚し時計が転がっていた。
―――――
―――――
「元はといえば俺のせいだよな・・・。元カノから貰ったのなんて使ってたら誰だって怒るよな」
（美希が元カレから貰った物を使ってたら俺もいやだろうし・・・）
今更くり返される後悔の念。
今日だけで何度目だろうか。
「ま、一昨日の罰だと思えば気も楽になるか」
これも今日何度目だろうか。体面は強がってみても、本当はかなり寂しいのだろう。心にわだかまりが出来ているようだった。
部屋全体に静寂が訪れる。僕の部屋があるアパートの近くには商

店街があり、そこから聞こえるクリスマス定番のＢＧＭが微かに聞こえるだけだった。
それが妙に切なくて、こんな日に風邪を引いている自分が本当に情けなく感じられた。
『ピンポーン』
静寂を破ったのはこの部屋の気の抜けた呼鈴。僕は布団を剥いで重い体を起き上がらせ、壁を伝いながら玄関を目指した。
「どなたですか？」
そう言うと扉の向うから聞き慣れた声が聞こえた。
「私だ。入るぞ」
「えっ！？美希？」
『ガンッ』
言葉を返すと同時に扉にぶつかる音。おそらく開くと信じてドアノブを回し引いたのだが、ロックされててその力そのままにドアにぶつかったのだろう。
「痛！コラ！入ると言っただろ！鍵を開けろ」

「あ、ああ」
返事をし、鍵を開けると直ぐさま入りこんで来た美希。挨拶も無く僕のおでこを叩いてきた。
「痛！なんだよ、いきなり…」
「なんだ、思ったより元気じゃないか」
謝る事無く言い返す。あまりに唐突に訪れて来た美希に返す言葉を無くしていた。
扉を閉め、僕は部屋のテーブルに、美希は台所へ行った。
「どうせろくな物食べてないだろう。私が今何か作ってやる」
手に持っていた袋を見せながら言って、直ぐさま料理に取り掛かった。
その後ろ姿を見ながら聞いてみた。
「今日は合コンだったんじゃないのか？」

「誰から聞いたんだ？まぁ私自身知らなかったんだが行ったよ。それで気付いてすぐに抜け出して来たんだ」
それを聞いてちょっとうれしかった。僕の為に来てくれたのだと分かってついついニヤついてしまった。
「なんだ？気持ち悪いなぁ。ご飯出来たぞ」
「あ、ああ」
話し掛けられ、すぐに表情を整えた。

ご飯を食べ終え、僕は美希を送ることにした。
「別にいいぞ、見送りなんて」
「ご飯作ってもらったお礼だよ」
「うん…、そ、それはいいんだが、その格好がな」
治りかけの体ではこの寒さはキツいと思い、５枚ほど上着を着込んでいて、見た目が変質者の様だった。
「でも大丈夫か？」
「美希の料理のお陰でバッチリだよ」
「そうか…」
しばらく談笑していると、美希が言った。
「もうここまでいいぞ。お前もキツいだろうから」
「え？大丈夫だけど…」
「良いから早く帰って寝て、風邪を治せ！」
「わ、わかった…」
美希の気迫に押され、言う通りにする事にした。すると美希が続けて言う。
「治ったら明日は休みだ。お前のおごりでどこか行こう。明日はクリスマスなんだから」
「え？本当に？」
「ああ、お、一昨日は私も悪かったからな。それの罪滅ぼしだ」

「ありがとうございます。でも明日はどこのお店も盛り上がってないだろうな？」
「いいんだ！明日がクリスマス本番なんだから。」
「はい。分かりました」
「うん、よろしい」
しばらく無言が続く。そして美希が少し目線を逸らしながら言った。
「や、やはり別れ際はキ、キスぐらいしたいものだな」
いきなり過激な事を言う美希に驚いた。
「で、でも風邪うつっちゃうよ？」
「私はお前の様な軟弱者じゃない！うつせるものならうつしてみろ！」
そう言った美希は目をつぶって用意している。
「じゃ、じゃあ」
目を閉じて頬を赤く染めた美希に軽くキスをした。
離れた僕達はしばらく無言で下を向いていた。先に口を開いたのは美希。
「ありがと…。じゃあまた明日な？」
「…うん。じゃあまた」
そう言うと美希は僕に背を向けて歩く。その後姿を見届け、見えなくなったら僕も部屋に向かう。
すると、
「あ、雪だ」
暗い夜空に白い綿毛の様に散りばめられ、とてもきれいに見えた。
雪を見ながら僕は心の中で呟いた。
――明日はきっと健やかになれますように。そしてこの幸せが当たり前に感じる事がありませんように――
夜空を見上げるのをやめ、また部屋に向かう。

「明日はどこに行こうかな？」

（後書き）

少し恋愛小説とは違う感じになってしまいました。でもこんな日常もあってもいいかな？って思い書いてみました。感想お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3271b/

雪に願いを…

2010年10月8日15時34分発行